英国 Royal Free Hospital 看護研修に参加して

看護学部看護学科　佐藤芙佐子（教授）、森山小統子（助教）

この研修は、三重県において国際的視野をもって活躍する医療職のリーダーを育成することを目的とした事業である三重県国際医療技術連携体制協議会（M-MUSLE: Mie Medical University Science Collaboration League）による看護職海外研修事業であり、英国ロンドン市にある Royal Free Hospital（以下、RFH）とその関連施設において実施された。研修は 9 日間（平成 28 年 2 月 27 日～3 月 6 日）にわたり、がん看護分野と老年看護分野の研修が行われた。研修生 6 名のうち本学看護学部からは 2 名の教員が参加し、英国での専門看護教育、及びそれぞれの専門分野における看護実践について、多くの知見を得ることができたので報告する。

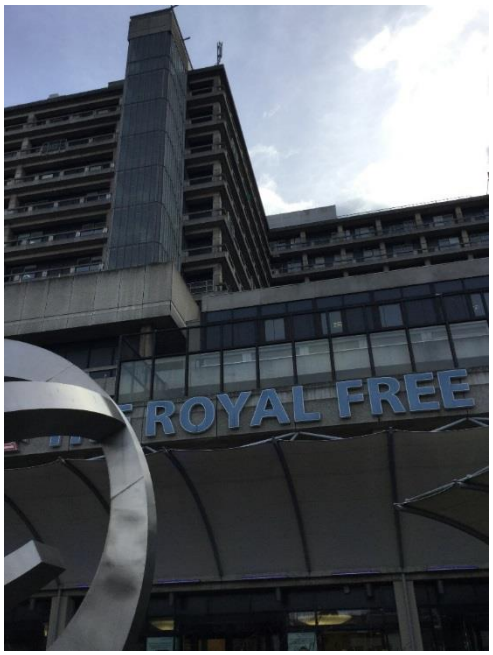
はじめに RFH の概要について紹介したい。RFH は英国の国営保健サービス（NHS）を運営母体とする教育病院・総合病院である。その歴史は古く、1828 年ビクトリア女王時代に開院し、無料で医療が提供された。19 世紀のコレラ流行時には唯一開院して治療に携わり、女王より“Royal”の称号を受けた名誉ある病院である。現在ではロンドン市内 30 ヶ所のクリニック、GP（家庭医）と連携しながら地域医療の中核となり、英国医療の発展に大きく貢献している。また、UCL（ロンドン大学）の教育機関としての役割も担っているほか、独自の海外研修プログラムを構築し、諸外国から医療スタッフや研究者を積極的に受け入れ、グローバルに教育・研究活動を行っている。

本研修で得た学びは数え切れないほどあるが、特に、がん看護分野において医師不在の中で化学療法を実施するクリニックでの NP（ﾅｰｽﾌﾟﾗｸﾃｨｼｮﾅｰ）や CNS（専門看護師）の活躍を実際に見ることによって、日本でも検討され始められている看護職の役割拡大について示唆を得ることができた。また、老年看護分野では、急性期の平均在院日数 5.9 日と短い英国（日本では 17.5 日）(OECD, 2012 より)においては、救急外来初療時に高

齢者を包括的にアセスメントすることにより入院回避を図るとともに、その後のフォローアップのために NP が高齢者施設や自宅にアウトリーチするシステムが運用されており、地域連携においては看護職による実践が要となっていた。

その他、MDT ミーティング（多職種専門家チームによる会議）が非常に多く開催されており、院内のみならず関連施設や地域のクリニックの医療スッタフと密に連携して、一人一人の患者の情報や問題を地域全体で共有しながら、シームレスで患者主体の医療やケアが提供されるシステムが運用されていた。さらに、ケアの質向上に向けての個々の看護職の自律性の高さは特に印象深かった。臨床の看護師が卒後教育で継続的に学び、ステップアップできる環境が整備されており、徹底した目標管理のもとスペシャリストを育成するための土壌がそこにはあった。英国の医療政策では効率化や生産性が強く求められている一方で、看護職の人材育成に対する理解と投資は大きいものがある。つまり、質の高い看護職を育てることは医療やケアの質を向上させ、一人一人の健康の維持・増進へと繋がることが英国では理解されているのである。視察期間中に、BBC の特集による深刻な医師不足・看護師不足の状況がメディアで流れていた。厳しい医療経済の中だからこそ、より活発な多職種連携や看護師の役割拡大にも影響していることが察せられた。

本事業は三重県が看護職者を海外派遣する初の試みであり、出発前の壮行会では、三重県鈴木知事より県内の看護職の人材不足を打開するべく、臨床における看護の質の向上、やりがいの向上に繋げられるような方策を検討していきたいことが述べられた。また、本事業計画を策定した M-MUSLE では、看護職以外の医療専門職の海外派遣も今後は視野に入れて検討されている。本学の国際交流を推進していくために、今後も継続して本事業に参加することが望まれるとともに、看護職以外の多職種においても海外研修制度が拡大され、活発な国際交流が図られることを願っている。



（写真１：RFH 正面玄関前）

（写真２：RFH 専門看護師との研修場面）

（写真３：RFH 老年科医より修了証書の授与）